

主よ、御名を知る人はあなたに依り頼む。
あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない。
苦しむ者の叫びを、忘れることはない。

貧しい者は決して忘れられない。
苦しむ者の希望は決して失われることがない。（詩篇9の11、19）

Those who know your name will trust in you, for you, LORD, have never forsaken those who seek you.

The needy will not always be forgotten, nor the hope of the afflicted ever perish.

御名を知る者—聖書では、名 の重要性が一貫して現れている。名とは、単なるなにかの名前ではなく、その本質を表すものとして用いられている。

神の名を信じる—それは神の本質たる真実や、永遠性、愛、正義—等々を信じるということであり、御名を知るとは、そうした神のことを知ること、体験的に、霊的に知っていることを意味する。

そのことは、例えば、山を知っているとは、単に山を単に遠くから見たことがあり、姿を見てその山の名前を言えるとか、地学的に知っているとか、その高さなどを知っていることでなく、その山がどんなに美しい渓谷、野草、樹木、風景東都があるか、また時としていかにうってかわった厳しい姿を現すか—等々をじっさいに歩き、登って体験的に知っていることであると同様である。

そのような意味で 神を深く知ればしるほど、人は、ほかの何ものにも頼まず、ただ神により頼む。私たちが病気になったり、歩けなくなったりするとき、家族や周囲の人たち、あるいは医者や看護師、そして技術(手術)や薬などに助けを求めよう。その助けなければ死に至ることもある。

そのような状況では全面的にそうした人々に頼ることになるだろう。しかしそのようなときであってもなお、そうした人間に頼りつつも、その背後におられる神を見つめて頼る。

そのような助けを提供してもらってもなお、人間は最終的には死に至る。あるいは、どんなにしても心の深い孤独感や絶望などは、人間ではどうすることもできないことがある。

死に至るような状況にあって、何に頼ることができようか。

人に頼るといっても、周囲の人は孤独に悩む人間のその深い痛みや悲しみを部分的にしかくみ取ることはできないゆえに、人間に頼ることの限界を思い知らされることになる。

そのようなときでも、なお全面的に頼ることができるのが、目には見えないが確たる存在であり続ける神—聖書に記されている真実でしかも愛の神、全能の神である。それは愛の神であるゆえに、この詩の作者が記したように、いかなる場合でも、見捨てることがないと信じて委ねることができる。ことに、苦しむ者、追い詰められた状況にある者の叫びや祈りを決して見捨てない—というのは、現代の私たちにとってもほかのいかなるものにもまして、大いなる励ましの言葉となっている。



リンドウには、多くの種類がありますが、このリンドウは、本州の中部以北から北海道の高山地域に見られるものです。

ここに示した以外のさまざまな種類のリンドウもその花の青色—ときに深い色合いを持っていて、それが私たちの心へ向けたメッセージを感じさせるものがあるため、多くの人たちから愛され、親しまれてきました。

この写真のものは、北海道の広大な領域に広がる大雪山系の主峰 旭岳（標高2291m）への登山道で見られたものです。

背景に見えるのがその旭岳の山頂に至る部分です。この花の見られたところから上部は、写真でも少し見えるように、溶岩ばかりが続く山道となっています。

遙かな昔—数千年前に激しい噴火活動がなされ、一帯は溶岩ばかりであったのが、次第にこのようなさまざまな高山植物が現れ、現在のように、高山植物の大群生が見られる豊かな山域となったと考えられています。

荒涼とした溶岩ばかりの大地にあっても、このような可憐な美しさとその深い色合いをたたえた植物が生み出される不思議を思います。

神の御手は、まことに全能の御手であり、いかなる状況にあっても、新たな美しいもの、命を生み出すのだというメッセージをたたえています。

私たちも、また、荒れた地、渴ききったような心の状態にあっても、神の愛の御手によって、いのちの水が流れるようにしていただき、美しい花を咲かせるようにしていただきたいと願っています。